

運動部活動等に対する社会的責任感に 関与する要因の地域差の検討

岡 田 猛

(1982年10月15日 受理)

Examination of Regional Difference on Factors Affecting
a Sense of Social Responsibility Needful for
Athletic Club Activity, etc

Takeshi OKADA

Abstract

Today, it is said generally that a sense of social responsibility is on the decrease, while a sense of private responsibility is increasing. In this paper, how a sense of social responsibility in the light of role-taking in class room and club activity in school is stipulated by 48 explanatory factors is examined. Those 48 explanatory factors consist of factor-group with face-sheet, life-rhythm of child, life-habit of child, contact and perception between child and his mother, child's receiving of mother's discipline, child-mother relation, home-condition, and mother's discipline-effort.

281 pairs of first graders of secondary school and their mothers in Kagoshima city and 181 pairs in islands in Kagoshima prefecture are analysed with Hayasi's quantification theory II respectively.

As a result of analysis, are extracted many routine factors which show regional difference. Hence, in teaching a sense of social responsibility, different steps are needed in two regions.

Correlation ratios (η) are 0.56, 0.31 and probabilities discriminating precision are 89%, 77%, in Kagoshima city and islands respectively.

I. は じ め に

今日、児童や生徒の実態の把握が、各方面から試みられている。それというのも、彼らの実態が単に過去にくらべて大きな変化を示しているというにとどまらず、その変化が問題状況としてとらえられる内容を多分に含んでいるからである。校内暴力、家庭内暴力、非行、身体的異常、低学力、登校拒否などが今日大きな問題となっている。

ところで、筆者もその一所属である「鹿児島子ども研究センター」では、鹿児島県内の児童・生徒の実態を解明すべく、1980年6、7月、1981年2月の2回にわたり、鹿児島市、川辺町、野田・高尾野町、名瀬市、沖永良部の各地域にわたり、小学5年、中学1年、中学3年、の児童・生徒とその母親について、総計4,172組を対象に調査を実施した。それは「子どもの自立」の問題を軸と

し、それを「基本的な生活習慣」と「しつけ」、「親子関係」とのかかわりでとらえようとするものである。

調査結果の全般的内容については、既にまとめられた報告書⁵⁾にゆずるとして、ここでは調査内容の一部である「社会的責任感」に焦点を絞り、そのありようがいかなる要因によって規定されているか、それが鹿児島市内と離島の間にかがいがああるかを、中学1年生を対象にして解明していきたい。

ところで、一般に責任感といわれるものが、今日の児童・生徒の前述した問題状況にいかにかかわっているかについては、種々の調査が行なわれている。ここでは、その一例を山形県教育センターがまとめた「中・高校生の問題行動に関する研究」報告書⁹⁾にみてることにする。

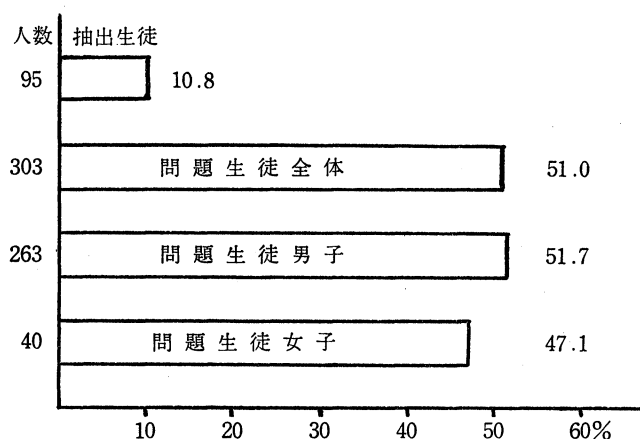


図1 責任感に乏しい者の割合 (山形県教育センター)

図1は、昭和54年度に、万引き、窃盗・強盗などの反社会的行動、薬物乱用、家出・無断外泊、登校拒否などの非社会的行動、不純異性交遊、わいせつ行為などの性に関する行動をひきおこした、中学の問題行動生徒の責任感をみたものである。

責任感に乏しい者の割合は、一般抽出生徒の10.8%に対して、問題行動生徒は、全体で51.0%と、4.7倍のちがいがあり、その間には、危険率1%で有意な差が認められる。

さらに表1は、主要な問題行動と責任感の関係を示したものである。責任感に乏しいことが、すべての問題行動に対して、なかんずく、家出、無断外泊、金銭強要に対して関係が深いことが察せ

表1. 主要な問題行動と行動・性格上の問題との関係 (山形県教育センター)

問題行動 性格上の問題	万引き	窃盗 強盗	飲酒 喫煙	家出 無断外泊	暴力行為	金銭強要
自主性に欠ける	47.3%	46.7	42.7	51.2	36.4	55.0
自己顕示欲強い	29.1	28.3	45.5	56.1	54.5	70.0
責任感乏しい	48.6	50.7	48.2	65.9	54.5	65.0
衝動性強い	34.5	34.9	40.0	58.5	59.1	75.0
情緒不安定	35.1	36.8	40.0	63.4	36.4	65.0

られよう。

このように、責任感、生徒の問題行動の背景を知るうえで重要な要因であるといえよう。

ところで、筆者は既に、鹿児島市内と川辺町の中学1年生については、社会的責任感を規定する要因について分析を行い、そこで幾つかの点を析出した。

社会的責任感の程度を規定する要因として、母親の年齢、居住地、親のしつけの子のうけとめ一遂行努力一、テレビの視聴時間、登校前の時間的余裕などの要因があげられ、また、下校から夕食の間の活動としての友人との遊びで、それが家であるのか、外で行なわれるかで社会的責任感のあり様が異なっていた。

今回は、社会的責任に対する積極群と態度未表明群の弁別に寄与する諸要因のウェイトを求め、両群の特徴を多次的に分析し記述することを試みる。そしてこの手続きを鹿児島市と鹿児島県離島の二地域に別々に行ない、地域差を検討したい。

II. 社会的志向性の概況

「滅私奉公から滅公奉私へ」というシェーマが論じられるように、意識や行動のあり方にとって現代は一つのエポックを印づけているかもしれない。

幾つかの調査によって状況を点描してみよう。

個人の幸福と日本全体との関係について、「個人が幸福になって、はじめて日本全体がよくなる」とする個人優先型が38.7%、「日本がよくなって、はじめて個人が幸福になる」とする社会優先型21.1%、「日本がよくなることも、個人が幸福になることも同じである」とする並列型33.6%とならび、青少年における個人志向性をわずかに示している⁶⁾。

別の調査²⁾によると、「自分の生活よりも、まず社会のことを考える」社会志向型は全体の10%と少ない。それに対して、「社会のことを考える前に、まず自分の生活をたいせつにする」私生活志向型は78%と高い。後者はさらに、「家庭では、一人一人が自分の好きなことをして過ごすよりも、家庭の団らんをたいせつにしたい」とする家族志向型・マイホーム型(50%)と、「家庭生活では、家族の団らんだけでなく、一人一人が自分の時間をもつことをたいせつにしたい」個人志向型(28%)に分かれる。

また、「現代青年のきままさを好む傾向や、趣味的なサークル活動を好む傾向は明らか」であり、「青年の忠誠の対象は、個人的な楽しみや趣味的な余暇活動に集中」し「現実の青年の意識の中には、身近な生活に重心がかかり過ぎ、社会＝公と積極的につながりを保っていかうとする、他者への献身の積極的意識は乏しい」という報告¹⁰⁾もある。

以上のような傾向は、米、独に比して日本において高く、「わが国青年の公共についての無関心ないし無責任さと、不満の高さ」が指摘されている⁷⁾。

ところでわれわれの調査では、責任感について、「あなたは、学級の係やクラブ(部活動)のしごとをひきうけたときにせいっぱいがんばりますか。」という質問で社会的責任感を、「あなたは、

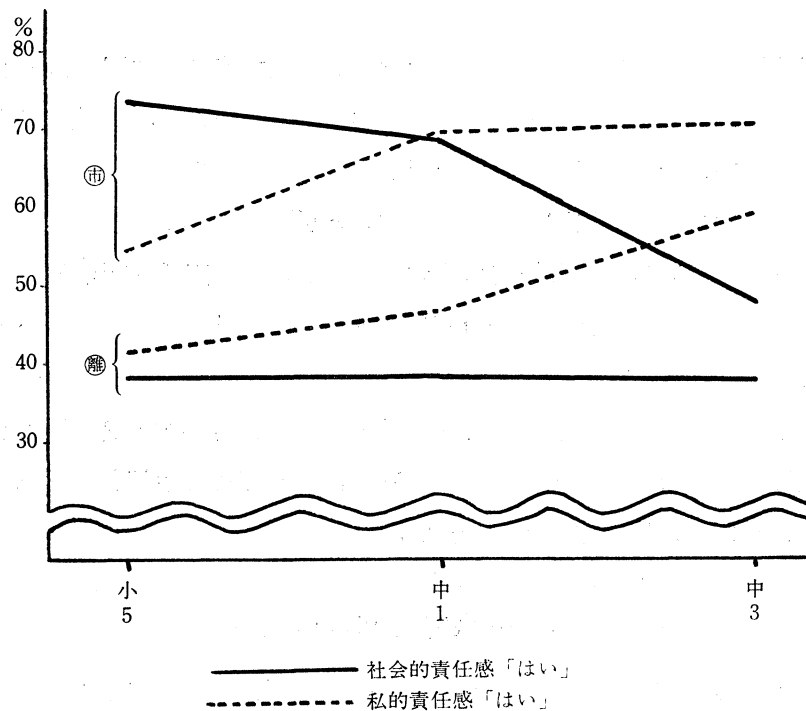


図2 責任感に対する回答

友だちと約束したことは、きちんとまもりますか。」という質問で私的責任感を明るみに出した。図2は今回の調査データよりみた回答状況である。

程度の差はあれ、両地域で私的責任感が学年とともに増加しているのに対し、社会的責任感には、市内で、中3で急激な低下、離島で横ばいの状態であり、前述の諸調査結果を、特に市内において、傾向として裏づけている。

III. 社会的責任感について

次に社会的責任の概念について一瞥しておきたい。

人間は社会的存在であるといわれるように、われわれはほとんどあらゆる場面で人間関係を通して、あるいは集団の一成員として生活している。その場合、活動を積み重ねるにつれて相互の間で、また集団において地位 (position) が出現・分化し、それがさらに安定していくにつれて、人間関係や集団が維持されていくことになる。

ところで、社会的地位とは、それがいかなる人によって占められようと、その占取者に対しては一定の活動が要請されているものであり、それは地位の占取者にとって義務としての様相をおびてくる。このような、ある地位に固有の活動的側面をわれわれは役割 (role) と呼んでいる。リント¹¹⁾ はそれゆえに、役割とは、特定の地位に結びついた文化型 (行動様式) の総体で、そこにはある地位を占めているすべての人に対して、社会が課する態度、価値、行動などを含んでいる、といっている。各自がその占める地位に要請される活動、つまり役割を果たさなければ、人間関係や

社会集団の存続は危うくなり、他の人々の不信をかうことになる。

このように考えてくると、社会的責任とは何よりも役割の遂行であり、人の占める地位にふさわしい行動を実行しうる能力のことであるといえよう。

さらに社会的責任にはもう一つの前提が必要になる。それは役割活動が自由なる意志に基づいて遂行されているということである。命令されたり、強制された役割活動では、それがたとえ履行されなくても、そのことについて真からの責任感が生じようもないのである。みずから自主的にひきうけた役割の遂行においてこそ責任感が生ずるのである。リントンのいう文化型もそこには一定の幅があるのであり、たとえ他律的に決められた役割においてさえ、その一定の幅の中からある行動を積極的に選択する場合には責任感が生ずるのである。

ところで、学校生活において、これまで述べてきたような意味での役割遂行としての責任感が試されるのは、生徒達が、自主的・主体的に活動する場を比較的に保障されている、生徒会活動、学級会活動、運動部活動、文化部活動、クラブ活動等からなる、特別教育活動においてであろう。社会的責任感を問うた前述の質問内容も、この意味で妥当であったといえるであろう。

大平³⁾によると、彼の責任意識の発達段階の中で、中学校期は「集団的課題解決への協力的責任意識の時期」と位置づけられている。

IV. 方 法

IV-1. 林の数量化理論第 II 類について

データ解析の方法としてこれまでよく用いられてきたのは、クロス分析、トリプル分析であった。しかし、それらの手法には、飽戸¹⁾の指摘するように大きな限界があり、多変量解析が重要視されてきた。林を中心にして開発されてきた数量化理論²⁾は、一定のモデルを演算して事後的に数量を与えること、それまでの多変量解析では分析することのできなかった質的変量をも量的変量と全く同様に同一の次元で扱えるようになったこと、等を大きな特徴としてもつものである。

数量化理論のうち、数量化理論第 II 類とは、多変量解析としての判別関数を、その扱えるデータを質的変数にまで拡大した解析方法である。

IV-2. 分析の対象（外的基準と説明変数）

分析の対象は次のごとくである。

鹿児島市	市内新興住宅地の中学 1 年生とその母親	194 組
	市内商業地区の中学 1 年生とその母親	220 組
離 島	鹿児島県名瀬市の中学 1 年生とその母親	181 組
	鹿児島県沖永良部の中学 1 年生とその母親	294 組

鹿児島市では、他の調査地区よりも、とりあげた両地区が最も都市的特徴を示すように思われることと、離島とのデータ数とのバランスをとるために新興住宅地と商業地区にした。離島は今回調

Ⅶ	しすの つるら け子け にどと 対もめ	30. 部屋の整理をするよう 31. 正直であるよう 32. 最後までやりとげるよう 33. 時間にけじめをつけるよう	C35 C36 C38 C39	①よくいう ②ときどきいう ③ほとんどいいわない ①よくいう ②ときどきいう ③ほとんどいいわない ①よくいう ②ときどきいう ③ほとんどいいわない ①よくいう ②ときどきいう ③ほとんどいいわない
	親子 子ど 関も 係一	34. 他の兄弟に比べてとくにしかる 35. 母親が口やかましい 36. 小遣いの使い方を干渉 37. おねだりを聞いてくれる	C43 C46 C52 C58	①はい ②どちらかといえばそうだ ③いいえ ①はい ②どちらかといえばそうだ ③いいえ ①よくする ②ときにはする ③いいえ ①はい ②ときにはいうことをきいてくれる ③いいえ
	家 庭 条 件	38. 子どもの夕食の時刻をきめている 39. 夕食は家族そろって 40. 小遣いは一定金額	M7 M8 M9	①きめている ②きまっていない ①はい ②そろわないほうが多い ①きめている ②きめていない
	し つ け 努 力	41. 部屋の整理をするよう 42. うそをつかないよう 43. 最後までやりとげるよう 44. 時間にけじめをつけるよう	M35 M36 M38 M39	①よくいう ②乱雑になっているときはいう ③いいわない ①よくいう ②問題があったときにはいう ③いいわない ①機会あるごとに ②途中で投げだすようなときに ③とくにいいわない ①自分で守らせる ②親がきめて守らせる ③けじめがないとき注意 ④とくにいいわない ⑤自由にさせる
Ⅷ	親子 子親 関一 係一	45. とくにこの子どもをしかる 46. 子どものすることに口出しをする 47. 小遣いの使い方に口を出す 48. ねだられると負ける	M43 M46 M52 M58	①はい ②どちらかといえばそうだ ③いいえ ①はい ②どちらかといえばそうだ ③いいえ ①はい ②ときにはきくことがある ③いいえ ①はい ②どちらかといえばそうだ ③いいえ

C: 子どもの回答 M: 親 (母) の回答 F: フェイス・シート

査した全データである。

次に判別対象としての外的基準であるが、前述した社会的責任に関する質問事項に対する「いいえ」の回答が極端に少ないため（市内で 1.7%，離島で 5.7%），「はい」回答者と「どちらともいえない」回答者の 2 群を外的基準とした。その人数は以下のとおりである。

鹿児島市	積極群	204 組
	態度未表明群	81 組
離 島	積極群	76 組
	態度未表明群	105 組

このことは、外的基準の判別グループの対照性を弱めることになり、したがって解析の成績を低くすることが予想されるが、統計手続き上やむをえないことである。

次に、説明変数は、表 2 にみるごとく、9 要因群からなる 48 アイテム 143 カテゴリーである。

子どもの基本的生活に関する実態や、母親との関係、それに特に母親の影響力をみるために母親に対する質問項目も全体で 11 項目、そのうち子どもの質問項目に対応する形で 8 項目加えた。なお、「生活リズム」と「生活習慣」については重複する面もあるかと思うが、前者を「生活行動を時系列によって区分した一日の枠組」、後者を「自然に容易にくりかえされる生活上の行動」と考えておきたい。

以上のような、外的基準、説明変数を全く一定にして、鹿児島市と離島の 2 地域のデータに別々に数量化理論第 II 類の解析を施した。そうすることによって、アイテム、カテゴリーのレベルにおいて、両地域の地域差を厳密に比較することが可能になる。

V. 分析の結果

V-1. 相関比、弁別判断適中率

はじめに全体としての今回の解析の精度をみておきたい。

まず、相関比(η)でみると離島が 0.56 で、市内が 0.31 である。離島で、とりあげた変数が、全分散の 56% を説明しているのはまずまずの成績であろう。それに対して市内では離島の約半分の精度である。市内においては、この分析でとりあげた生徒の基本的生活行動以外の他の複雑な要因が、彼らの社会的責任感のあり様に関与しているのでであろう。従って、市内における生徒に対する責任感育成はより困難であることを窺わせる。それに対して、離島においては、まだ、基本的な生活行動の形成によって、かなりの程度社会的責任感を育てる可能性が残っている、といえる。

次に弁別判断適中率をみると、市内 77%，離島 89% と、これも離島の成績がよい。しかし市内でもこの指標では、ここでの説明変数に対する回答パターンによって、社会的責任感に対し、「積極的」であるか、「態度未表明的」であるかを、4 人のうち 3 人までは予測することができるということであるから、悪い成績であるとはいえないであろう。

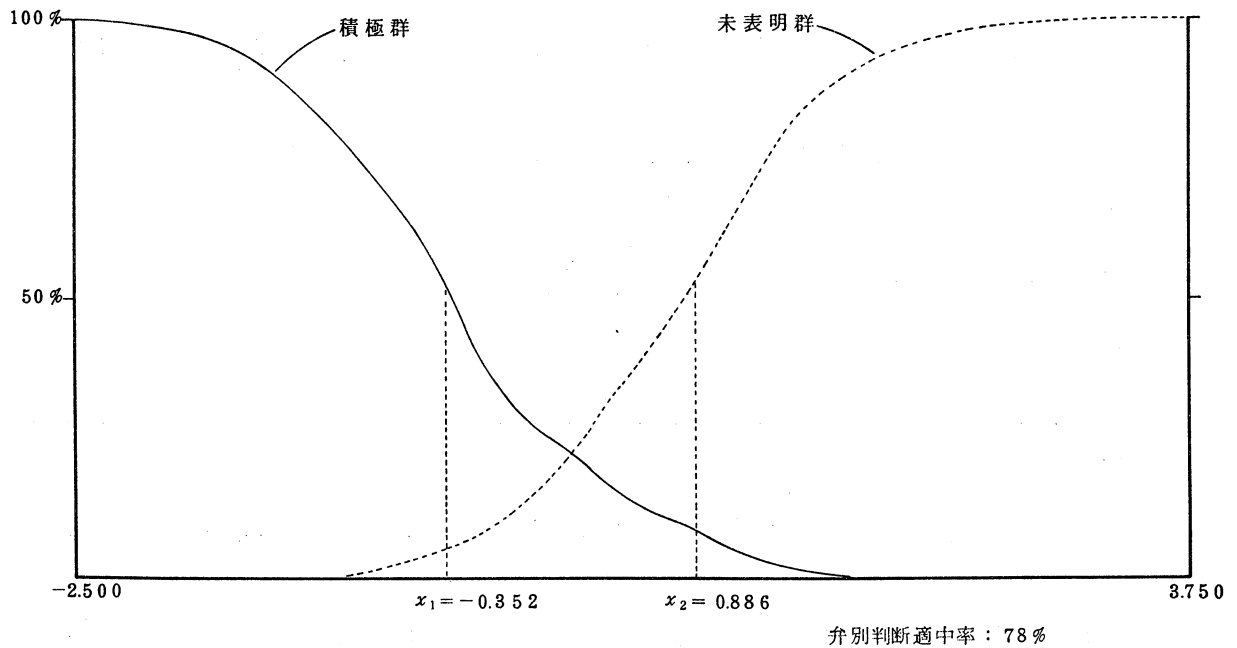


図 3 社会的責任感の判別グラフ —市内—

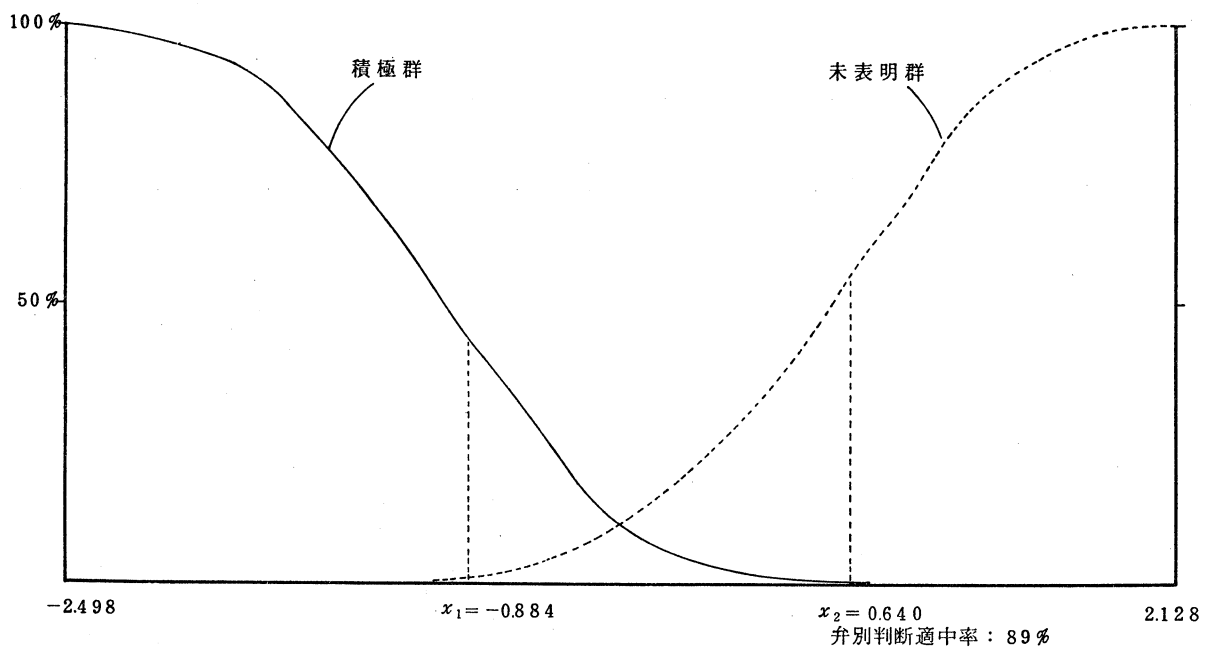


図 4 社会的責任感の判別グラフ —離島—

図3と図4は、それぞれ市内、離島におけるサンプルスコアの累積パーセントを示したものであり、図中における分布曲線の重なったところが判断の誤った部分である。

以上、全体としての分析精度を表わす指標として、相関比と弁別判断適中率をみたが、特に相関比において両地域に差が認められた。

V-2. 偏相関係数, レンジ

表3は、とりあげた変数個々の、社会的責任感の判別に対する寄与の度合を偏相関とレンジで、

Ⅰ	しすの つるう け子け にどと 対もめ	30. 部屋の整理をするよう 31. 正直であるよう 32. 最後までやりとげるよう 33. 時間にけじめをつけるよう	.333 .106 .331 .030	1 27 5 45	102 28 85 8	5 31 11 44	.002 .197 .149 .094	47 1 7 21	1 76 85 123	47 12 10 3
	親 子 関 係	34. 他の兄弟に比べてとくにかる 35. 母親が口やかましい 36. 小遣いの使い方を干渉 37. おねだりを聞いてくれる	.116 .237 .075 .289	23 11 33 7	31 91 23 98	29 9 33 6	.104 .138 .126 .087	17 10 12 24	40 60 51 35	25 17 21 28
	家 庭 条 件	38. 子どもの夕食の時刻をきめている 39. 夕食は家族そろって 40. 小遣いは一定金額	.158 .013 .088	17 46 30	41 4 19	23 46 34	.145 .112 .015	8 14 46	63 43 5	15 24 46
	し つ け 努 力	41. 部屋の整理をするよう 42. うそをつかないよう 43. 最後までやりとげるよう 44. 時間にけじめをつけるよう	.174 .109 .197 .265	14 26 12 8	46 38 72 191	19 24 15 4	.130 .033 .111 .110	11 39 15 16	112 28 94 76	5 34 7 13
Ⅱ	親 子 関 係	45. とくにかこの子どもをしかる 46. 子どものすることに口出しをする 47. 小遣いの使い方に口を出す 48. ねだられると負ける	.081 .146 .309 .133	31 20 6 21	31 41 92 38	28 21 8 25	.090 .094 .064 .058	23 20 31 34	51 55 29 23	22 20 33 35

C: 子どもの回答
M: 親 (母) の回答
F: フェイス・シート

相関比: 0.56
弁別判断適中率: 89%
* レンジは見やすいように100倍にしてある

相関比: 0.31
弁別判断適中率: 77%

離島、市内の二地域別に示したものである。

前述したように、相関比が離島において高いため、偏相関係数は概して離島において高いが、ここでは各地域内での変数の相対的な寄与度を比較するために順位を中心にして、レンジとあわせてみていきたい。

いずれの地域においても判別力の高い変数は、母親の年齢、起床から登校までの時間、最後までやりとげるよう（しつけに対する子どものうけとめ、以下子と略する）、母親が口やかましい（子）、等であり、子どもの性別、朝の排便、下校から夕食の間一ひとりで遊ぶ一、下校から夕食の間一テレビを見る一、下校から夕食の間一家の手伝い一、下校から夕食の間一その他一、親との会話一友達や遊びのこと一、等はいずれの地域でも判別力が弱い。

相対的に離島において判別力の強い変数は、部屋の掃除を自分で、下校から夕食の間一寝る一、部屋の整理をするよう（子）、おねだりを聞いてくれる、時間にけじめをつけるよう（子に対する親のしつけ努力、以下親と略する）、小遣いの使い方に口出しをする（親）等であり、逆に、父親の学歴、テレビ視聴時間、家での勉強時間、正直であるよう（子）、時間にけじめをつけるよう（子）等の変数は、市内での判別力が相対的に高い。

親子の対になった変数では、「しつけ」についても「親子関係」についても一般に子ども側の判別力が高いが、逆に親の判別力の高い変数として、離島では「時間にけじめをつけるよう」、「小遣いの使い方に口を出す」、市内で「部屋の整理をするよう」がある。

V-3. カテゴリーウェイト

次に、偏相関とレンジからみて、比較的判断力が高いと思われる変数を取りあげ、それらの判別に対する具体的内容をカテゴリーウェイトでみていきたい。

図5は、市内における判別力上位変数のカテゴリーウェイトを図示したものである。

母親の年齢では、30歳未満と「いない」が未表明群に強く効いており、31～35才、51～55才が積極群に効いている。成人前の出産や欠損家庭においては社会的責任感は育ちにくいのであろう。

テレビ視聴時間では、きれいな傾向が出ていて、「みない」から視聴時間がふえるにつれて、責任感が減退していつている。

起床から登校までの時間では、1時間～1時間20分を除いては、時間が長くなることがむしろ責任感を減退させている。

家での勉強時間では、少ないことも多いことも社会的責任感に対して消極的に寄与している。

父親の学歴の高さは、その子の社会的責任感の強さに寄与しており、これはきれいな直線的傾向を描いている。

「正直であるよう（子）」は、社会的責任感との間に直線的な関係は認められず、解釈が困難である。

「部屋を整理するよう（親）」は、そういうしつけをしない場合、子どもは社会的責任に対して積

アイテム	カ テ ゴ リ ー	ウ ェ イ ト	←積極群 -0.5 0 0.5→ 未表明群→	レンジ	偏相関
母 親 の 年 齢	30 歳 未 満	.882			
	31 ~ 35 歳	-.724			
	36 ~ 40 歳	-.060			
	41 ~ 45 歳	.220			
	46 ~ 50 歳	.217			
	51 ~ 55 歳	-1.281		①	②
	56 歳 以 上	.000		4.015	.192
	い な い	2.734			
一見 日 に る テ レ ビ を 間	見 な い	-.957			
	1 時 間 以 下	-.197		②	⑤
	2 時 間 以 下	.032		1.354	.163
	3 時 間 以 下	.397			
	3 時 間 以 上	.196			
起 ま で か ら の 登 時 校 間	20 分 以 下	.004			
	20 ~ 40 分	-.062		④	⑥
	40 ~ 60 分	.248		1.194	.158
	1時間~1時間20分	-.743			
	1 時 間 20 分 以 上	.450			
家 勉 強 で 時 の 間	あまりしない	.377			
	1 時 間 以 下	.759			
	2 時 間 以 下	-.216		⑥	④
	3 時 間 以 下	-.078		.975	.182
	3 時 間 以 上	.443			
父 親 の 学 歴	中 学 校 卒 業	.692			
	高 等 学 校 卒 業	-.119		⑧	③
	短 期 大 学 卒 業	-.161		.924	.191
	大 学 ・ 大 学 院 卒 業	-.232			
正 直 よ う あ ◎	よ く い う	-.233			
	と き ど き い う	.530		⑫	①
	ほ と ん ど い わ な い	-.193		.763	.197
部 屋 を 整 理 ◎	よ く い う	-.038			
	乱雑になっている ときはいう	-.061		⑤	⑪
	い わ な い	1.059		1.120	.130
最 後 ま で や ◎	よ く い う	-.191			
	と き ど き い う	.236		⑩	⑦
	ほ と ん ど い わ な い	.655		.846	.149

図 5 社会的責任感の弁別 (弁別力上位のアイテム) —市内—

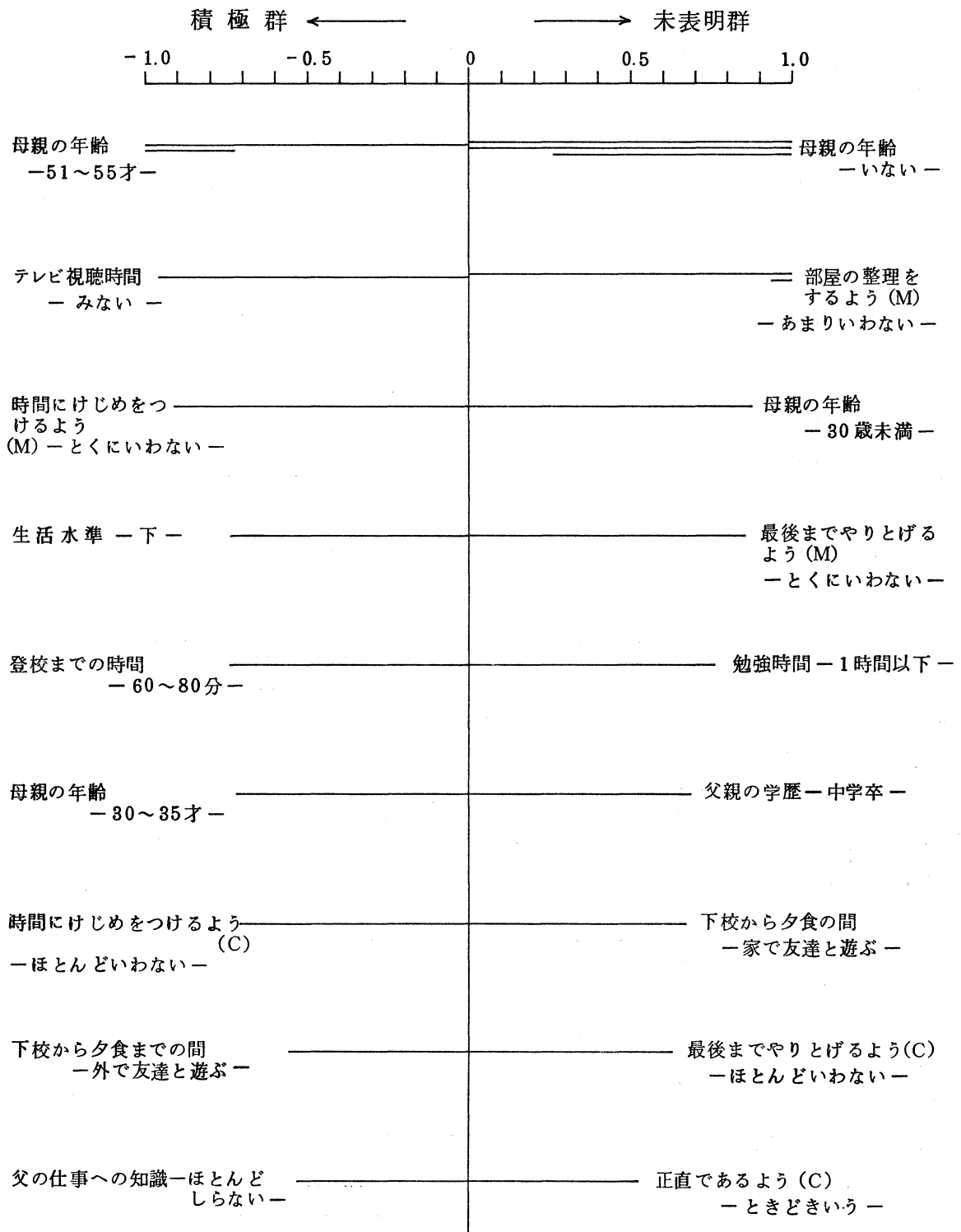


図 6 社会的責任感の弁別に寄与する主要なカテゴリ・ウェイト（市内）

極的でなくなっている。

「最後までやりとげるよう(子)」は、「よくいう」が積極的に、「ほとんどいわない」が未表明に、これもきれいな直線的傾向がでている。

図6は、上記変数を含めて、特に外的基準に対して効いているカテゴリーを上位からひろい出したものである。ほとんどのカテゴリーが上述した変数に含まれているが、それ以外に、積極群に効いているカテゴリーとして、時間にけじめをつけるよう(親)―とくにいわない―、生活水準―下―、時間にけじめをつけるよう(子)―ほとんどいわない―、下校から夕食の間―外で友達と遊ぶ―、父の仕事への知識―ほとんど知らない―が、未表明群に効いているカテゴリーとして、最後までやりとげるよう(親)―とくにいわない―、下校から夕食の間―家で友達と遊ぶ―、が抽出されている。下校後に友達と遊ぶのでも、それが家でなされるのか、外でなされるかは、社会的責任感に対して対照的な弁別をすることが注目される。

次に、同様にカテゴリーウェイトを離島についてみていくことにする。

判別力上位変数をみると、市内とは変数、順位においてかなり異なっている。(図7参照)

「部屋の掃除を自分で」は、自身の実行程度においては「はい」が積極群、「あまりしない」が未表明群、「ときどきする」がその中間と、直線的傾向を示している。ただ母親の代行が積極群に効いているのは解釈困難である。

起床から登校までの時間は、短い方から長い方にかけて積極群から未表明群へわりときれいな傾向がでている。ここでとりあげたデータでみるかぎり、登校前の時間的余裕という生活における望ましい傾向は、社会的責任感の強さにそのまま連動してはならず、逆の関係を示している。

母親の年齢では、55歳以下では、年齢の高さとその子の社会的責任感とは比例関係にある。しかし、「いない」は積極群に効いているのは、市内と逆であり、この点データをふやして追跡しなければならない。母親の成年以前の出産が、特に強く未表明群に効いているのは市内と一貫している傾向である。

「部屋の整理をするよう」にとの母のしつけに対する子どものうけとめは、「よくいう」とうけとめている生徒ほど積極群に傾斜している。この変数ではわりと直線的傾向がでている。

「時間にけじめをつけるよう」にとの母親のしつけ努力は、判然とした傾向は示していないが、大まかにいうと、しつけ努力の強い方が積極群に、弱いまたはしない方が未表明群に効いている傾向が窺える。

「おねだりを聞く」に対する「はい」という子どものうけとめが、特に強く積極群に効いている。偏相関が0.309ときわめて高いけれども、解釈が困難である。

親の子に対する「小遣いへの口出し」傾向では、少ないほど積極群に効いており、きれいな傾向がでている。この点「母親が口やかましい」とうけとめる子どもほど未表明群に効いている傾向と共通している。

「最後までやりとげるよう」にとの親のしつけに対する子どものうけとめには、一貫した傾向は

アイテム	カテゴリー	ウェイト	←積極群 0 未表明群→		レンジ	偏相関
			-0.5	0.5		
部自 屋の 掃除 を で	する	-.355				
	ときどきする	.328				
	あまりしない	.939			③	②
	お母さんなどが する	-.488			1.376	.360
起 床 で の 時 間	20分以下	-.358				
	20～40分	-.214				
	40～60分	.415				
	1時間～ 1時間20分	.224			②	③
	1時間20分以上	1.189			1.542	.342
母 親 の 年 齢	30歳未満	1.705				
	31～35歳	-.002				
	36～40歳	.108				
	41～45歳	.068				
	46～50歳	-.258			①	④
	51～55歳	-.488			5.667	.341
	56歳以上	3.179				
	いない	-2.488				
部を する の 整 理 う(C)	よくいう	-.374				
	ときどきいう	.474			⑤	①
	ほとんどいわない	.642			1.015	.388
時を 間つ にけ ける じよ めう(M)	自分で守らせる	-.124				
	親がきめて 守らせる	-.587				
	けじめがないとき 注意	.249				
	とくにいわない	.606			④	⑧
	自由にさせる	.171			1.198	.341
おを ね聞 だりく(C)	はい	-.815				
	ときには きいてくれる	.167			⑥	⑦
	いいえ	-.029			.917	.309
小口 遣へ のし(M)	はい	.556				
	ときには	-.103			⑧	⑥
	いいえ	-.361			.917	.309
最 後 ま で や りう(C)	よくいう	-.375				
	ときどきいう	.478			⑩	⑤
	ほとんどいわない	-.138			.854	.331
下 タ 校 食 寝 か の ら 間	する	.890				
	しない	-.080			⑦	⑩
母か 親ま がし 口や(C)	はい	.729				
	どちらかといえば そうだ	.110			⑨	①
	いいえ	-.181			.910	.237

図7 社会的責任感の弁別（弁別力上位のアイテム）—離島—

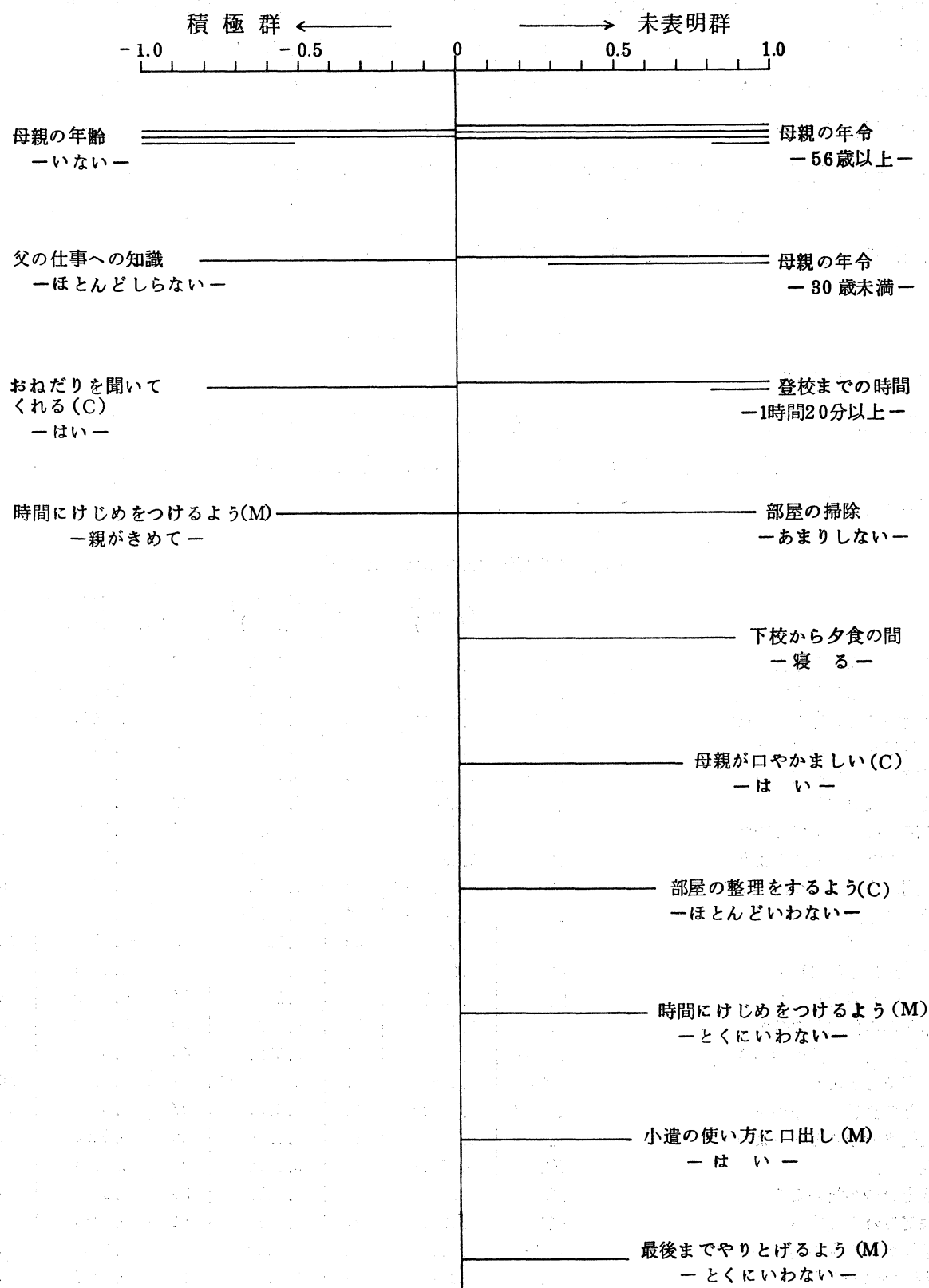


図 8 社会的責任感の弁別に寄与する主要なカテゴリーウェイト — 離島 —

でていない。特に「ほとんどいわない」ことが積極群に効いており、この点市内ともことなる。

下校から夕食の間一寝る一では、その肯定者が特に強く未表明群に効いている。

図8は、これまでみてきた判別力上位変数を含めて、全体的にみてウェイトが0.5以上のカテゴリーを選び出したものである。上記上位変数以外では、積極群に、父の仕事への知識一ほとんど知らない一、未表明群に、最後までやりとげるよう(親)一とくにいわない一、があがっているだけである。積極群に対する寄与度の高いカテゴリーの少なさは、相関比の離島における高さを勘案すると、逆に多くのカテゴリーによる安定的寄与に負うものであろう。

V. 地域差の検討

V-1. 偏相関係数

表4は、離島と市内におけるアイテムのそれぞれの偏相関を、右欄に示した両地域の偏相関係数の差の絶対値の大きさの順に示したものである。従って、方向を別にすると、上位のアイテムほど、その社会的責任感に対する判別力に地域差があるということになる。

表4. 偏相関係数よりみた地域差一覧表

ア イ テ ム		偏 相 関 (離島)	順位	偏 相 関 (市内)	順位	偏相関の差 (離島一市内)	順位
部屋の整理をするよう	C35	0.3828***	1	0.0019	47	0.3808**	1
部屋の掃除を自分で	C10	0.3599***	2	0.0471	38	0.3127**	2
小遣いの使い方に口を出す	M52	0.3094***	6	0.0635	31	0.2459**	3
おねだりを聞いてくれる	C58	0.2894***	7	0.0868	24	0.2025*	4
下校から夕食の間一寝る	C13-7	0.2451***	10	0.0297	42	0.2153*	5
朝、一人で起きる	C1	0.2543***	9	0.0579	33	0.1963*	6
起床から登校までの時間	C15	0.3416***	3	0.1575**	6	0.1841*	7
最後までやりとげるよう	C38	0.3314***	5	0.1493*	7	0.1821*	8
時間にけじめをつけるよう	M15	0.2646***	8	0.1104	16	0.1542*	9
母親の年齢	F5	0.3410***	4	0.1923***	2	0.1486*	10
父親の学歴	F6	0.0755	32	0.1906**	3	-.1150	11
母親が口やかましい	C46	0.2372**	11	0.1382*	10	0.0989	12
夕食は家族そろって	M8	0.0133	46	0.1122	14	-.0989	13
布とんの仕末を自分で	C5	0.1699*	15	0.0738	30	0.0960	14
親との会話一世の中の事	C20-5	0.1139*	24	0.0220	43	0.0919	15
正直であるよう	C36	0.1057	27	0.1966***	1	-.0909	16
親との会話一将来の事	C20-4	0.1657*	16	0.0797	27	0.0859	17
最後までやりとげるよう	M38	0.1966*	12	0.1114	15	0.0852	18
生活水準	F15	0.1597*	18	0.0814	26	0.0783	19
うそをつかないよう	M36	0.1088	26	0.0330	39	0.0758	20
ねだられる負ける	M58	0.1327	21	0.0578	34	0.0749	21
下校から夕食の間一外で友達と遊ぶ	C13-6	0.0301	44	0.1039	18	-.0738	22
小遣いは一定金額	M9	0.0877	30	0.0149	46	0.0727	23
時間にけじめをつけるよう	C39	0.0295	45	0.0935	21	-.0639	24
子どものすることに口出しをする	M46	0.1463	20	0.0936	20	0.0527	25
小遣いの使い方を干渉	C52	0.0748	33	0.1258*	12	-.0510	26

表 4. (つづき)

ア イ テ ム		偏 相 関 (離島)	順位	偏 相 関 (市内)	順位	偏相関の差 (離島-市内)	順位
下校から夕食の間一ひとりで遊ぶ	C13-2	0.0075	48	0.0559	36	-0.0483	27
勉強の始め, 終りの時刻をきめている	C8	0.0301	43	0.0770	28	-0.0468	28
下校から夕食の間一家で勉強	C13-1	0.1000	29	0.0560	35	0.0439	29
部屋の整理をするよう	M35	0.1742*	14	0.1303*	11	0.0439	30
親との会話-友達や遊びの事	C20-2	0.0617	36	0.0213	44	0.0404	31
下校から夕食の間一本を読む	C13-4	0.0389	41	0.0765	29	-0.0376	32
下校から夕食の間-その他の事	C13-10	0.0513	38	0.0171	45	0.0341	33
下校から夕食の間-塾やけいこごとに行く	C13-9	0.1114	25	0.1446*	9	-0.0331	34
一日にテレビを見る時間	C16	0.1952*	13	0.1630**	5	0.0321	35
親との会話-勉強の事	C20-3	0.0685	34	0.0963	19	-0.0278	36
下校から夕食の間一家の手伝い	C13-8	0.0528	37	0.0304	41	0.0223	37
家での勉強時間	C17	0.1601*	17	0.1824**	4	-0.0222	38
出生順位	F14	0.0642	35	0.0836	25	0.0194	39
下校から夕食の間一家で友達と遊ぶ	C13-5	0.0425	39	0.0581	32	-0.0156	40
親との会話-学校でのでき事	C20-1	0.1278	22	0.1139	13	0.0139	41
子どもの夕食の時刻をきめている	M7	0.1576	17	0.1454*	8	0.0122	42
他の兄弟に比べてとくにしかる	C43	0.1161	23	0.1044	17	0.0177	43
父の仕事への知識	C21	0.1039	28	0.0931	22	0.0107	44
朝の排便	C4	0.0392	40	0.0496	37	-0.0103	45
とくにこの子どもをしかる	M43	0.0805	31	0.0901	23	-0.0095	46
子どもの性別	F3	0.0108	47	0.0019	48	0.0089	47
下校から夕食の間-テレビを見る	C13-3	0.0385	42	0.0306	40	0.0078	48

C: 子どもの回答

M: 親(母)の回答

F: フェイス・シート

相関比: 0.56

弁別判断適中率:

89%

相関比: 0.31

弁別判断適中率:

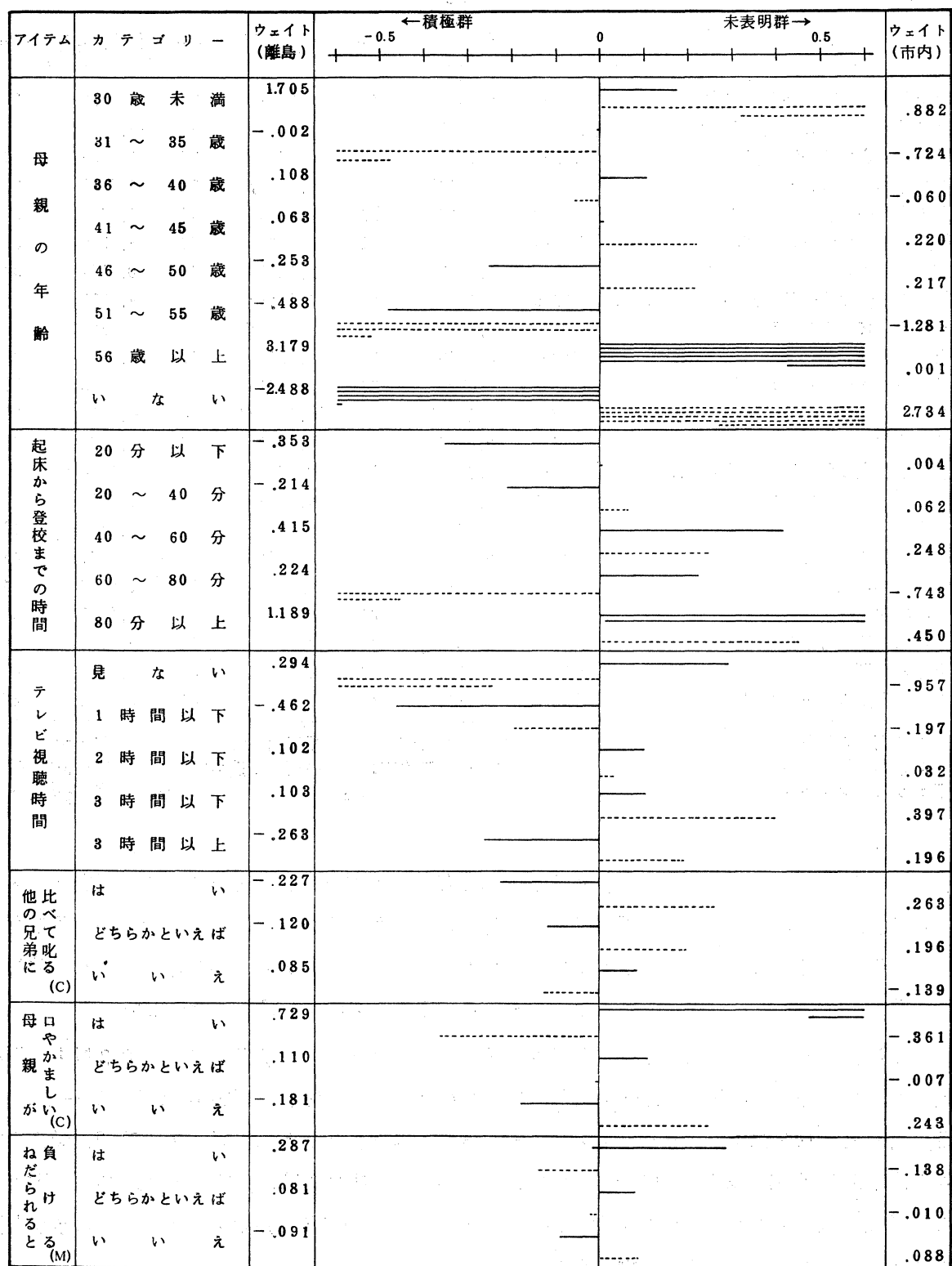
77%

***... $p < 0.001$ **... $p < 0.01$ *... $p < 0.05$

離島, 市内の欄についている有意性表示は, 真の偏相関がゼロであるという帰無仮説を t テストを用いて検定したものである。右欄の両地域の差における有意性表示は, 両地域の偏相関係数を z' 変換し, それを臨界比 (critical ratio) で検定したものである。いずれも, 実測値ではなく, 数量化された数値に対して施した検定であるので, その点, 斟酌して読まなければならない。

部屋の整理をするよう(子), 部屋の掃除を自分で, の2変数では, 偏相関の差が0.3以上で極めて大きく, 小遣いの使い方に口を出す(親), おねだりを聞いてくれる, 下校から夕食の間一寝る一, の各変数で差が0.2以上と大きい。さらに, 朝一人でおきる, 起床から登校までの時間, 最後までやりとげるよう(子), 時間にけじめをつけるよう(親), 母親の年齢, 父親の学歴, の各変数でもその差が0.1以上とこれまた無視できない差がある。これらの変数の差の方向は, 父親の学歴を除いてはいずれも離島における判別力が大である。

親のしつけ努力や, 親のしつけの子のうけとめ, 生徒の生活リズムに関する, 操作可能な変数の偏相関が離島において大きいことは, 図2でみた現状における社会的責任感の較差を回復する可能性の高さを示唆するものとうけとてよいだろう。



----- 市内
————— 離島

図9 カテゴリーへの反応パターンにおいて地域差の認められる要因

V-2. カテゴリーウェイト

次にカテゴリーにおけるウェイトの出現パターンにおいて、比較的に地域差の認められる変数をみておきたい。(図9 参照)

母親の年齢では、傾向において一貫した対照性は認められないが、56歳以上における両地域の違いが特著である。この点、前述したようにサンプルをふやして追跡する必要がある。

起床から登校までの時間は、離島ではきれいな直線的傾向が認められるのに対して、市内では、60～80分のみが積極群に効いていて、直線的傾向にない。

テレビ視聴時間では、離島の「1時間以下」を除けば、全体として逆の傾向がみられる。

他の兄弟にくらべてしかる(子)以下3変数では、両地域とも傾向としてそれぞれはっきりでていて、しかもその傾向が対照的な関係にあるところに特徴がある。社会的責任感を育てる際に、同じ項目について、両地域では全く逆の対応が要請されるということで興味深い。

VI. お わ り に

今回の生徒の非行をはじめとする問題状況に深いかかわりがあるとみられる社会的責任感について、中学1年生の親子を対象にして、林の数量化理論第II類により分析し、社会的責任に対する「積極群」と態度「未表明群」の弁別に対する説明変数の効果を鹿児島市と離島の2地域別にみて、地域差を検討してきた。

とりあげた説明変数による全体として判別力は離島において高く、市内にくらべて積極性に劣る離島生徒の責任感育成の可能性が示唆された。

この点、個々の説明変数の偏相関が市内よりも離島において大きい変数に、しつけをめぐる親子の認識に関する変数や、生活リズムに関する変数といった比較的に操作可能なものが含まれていることは注目されてよいであろう。

弁別判断適中率も両地域ともかなりの精度を得ている。

全体として、分析結果の記述にとどまって、社会的責任感を育成するという観点から考察を深める余裕はなかった。この点はしかし、いちいち説明するまでもなく、用いた図や表を見ることによってはっきりしてくる事柄も多い、と思う。

例えば、変数のカテゴリーウェイトをみることによって、未表明群に効いているカテゴリーから、積極群に効いているカテゴリーへ、しつけや、生活習慣、生活リズム内容の重点を移すことによって、社会的責任感を高めることが考えられてよいであろう。

ただその場合、鹿児島市と離島では画一的であってはならないことは、今回の分析結果から明白である。図9でみたように、他の兄弟に比べて叱る(子)、母親が口やかましい(子)、ねだられると負ける(M)といった項目にいたっては、両地域では全く逆の対応が要請されるのである。責任感の育成についても、それぞれの地域の実態に応じたしつけや教育がなされなければならないのである。

しかしいづれにしても、解析結果は、それぞれの地域についてのフィールドワークにもとづく理解や、なによりも、当該地域生活者による追体験的理解によって血肉化されなければならないだろう。このことなしの画一的実践化が危険であることはいうまでもない。

(附記) 本研究は「鹿児島子ども研究センター」の共同研究の成果の一環であるが、文責は筆者のみが負うものである。データの解析には鹿児島大学電子計算機室にお世話になった。共同研究者に対してと同時に、記して感謝の意を表したい。

なお本論文の概要は、日本体育学会第33回大会(1982. 10. 15~17 於東京大学教養学部)において発表した。

註

- 1) 鮑戸弘,「数量化理論—社会行動研究における適用の効用と限界について—」,社会心理学会編,年報社会心理学第5号,1964, p.89.
同上,社会調査入門,日経新書,1971, p.40, pp.132-134.
- 2) NHK放送世論調査所編,現代日本の意識構造,日本放送出版協会,1977, pp.158-159.
- 3) 大平勝馬,「責任意識とその発達」,教育心理 Vol.14-11,日本文化科学社,1966, p.9.
- 4) 岡田猛,「社会的責任感を規定する要因の検討」,鹿児島子ども研究センター研究報告 No.1, 1982, pp.45-57.
- 5) 鹿児島子ども研究センター,鹿児島の子どもと親の生活と意識調査報告書(第1次),1981
同上,鹿児島の子どもと親の生活と意識調査報告書(農村・離島編),1982.
- 6) 総理府青少年対策本部,いまの青年・いまの大人—青少年の社会性と個人性に関する研究調査報告書一,大蔵省印刷局,1981, pp.114-118.
- 7) 同上,青少年のルール観,大蔵省印刷局,1975, p.1.
- 8) 林知己夫,数量化の方法,東洋経済新報社,1972,データ解析の考え方,東洋経済新報社,1977,参照.
- 9) 山形県教育センター,「中・高校生の問題行動に関する研究」報告書,1982.
なお引用は,「内外教育」1982年9月3日付の pp.14-17 よりおこなった。
- 10) 吉田他編,現代青年の意識構造,日本放送出版協会,1979, pp.115-120, pp.165-173.
- 11) ラルフ・リントン(清水・犬養訳),文化人類学入門,創元新社,1966, p.100.